

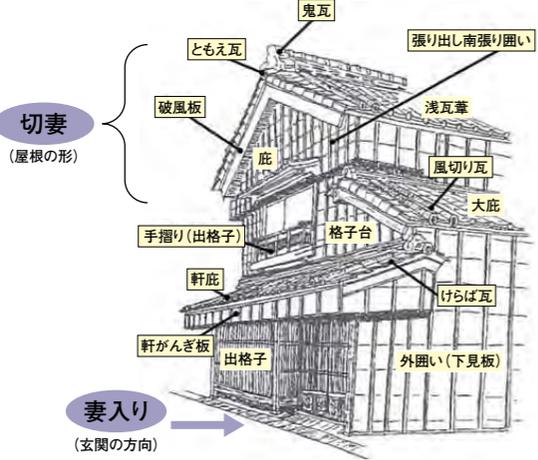
# ホットNEWS: 神宮にまつわる3つの視点

## 1 伊勢のまちなみ保全再生

現在、内宮おはらい町への来訪者は年間約800万人にまで増えています。実は、まちなみ保全再生に取り組む前の昭和60年代には、約20万人にも落ち込み、活気を失った時代がありました。いまの賑わいは綿密な都市計画によるものなのです。

**「切妻、妻入り」のまちなみ**  
京都の町屋は、「切妻、平入り」が多いのに対して、伊勢では「切妻、妻入り」が多いのが特徴です。屋根の頂点に棟の稜線が1本通り、両側に屋根が流れる形を切妻造りと言います。また、屋根の長辺側に出入口があるものを平入りと言ひ、屋根の短辺側に出入口があるものを妻入りと言います。こうした伝統的な建築様式をふまえて、まちなみを再現したのが、おはらい町やおかげ横丁の姿なのです。現在、伊勢では、おはらい町以外にも二見浦の夫婦岩表参道のまちなみにおいても保全再生に取り組んでいます。

**伝統的な歴史都市「伊勢」**  
歴史都市のまちづくりに大切なことは、何より「歴史文化の保持と育成」、「タイミング」そして「市民と行政の協働」です。伊勢のまちづくりに関して、市民と行政の協働を得やすいのは、心をひとつにできる「式年遷宮」があるからこそだと思います。また、おはらい町の整備を本格的に開始したのは、地方都市でリゾート開発がすすんだバブル時代。そんな時代にあっても、おはらい町では、あくまでも伊勢固有の歴史的なまちなみの保全再生を目指した点が画期的です。現在のおはらい町の繁栄を見れば、伊勢固有の歴史文化を大切にしながらゆえに、人々に永く変わらず愛されているの是一目瞭然です。

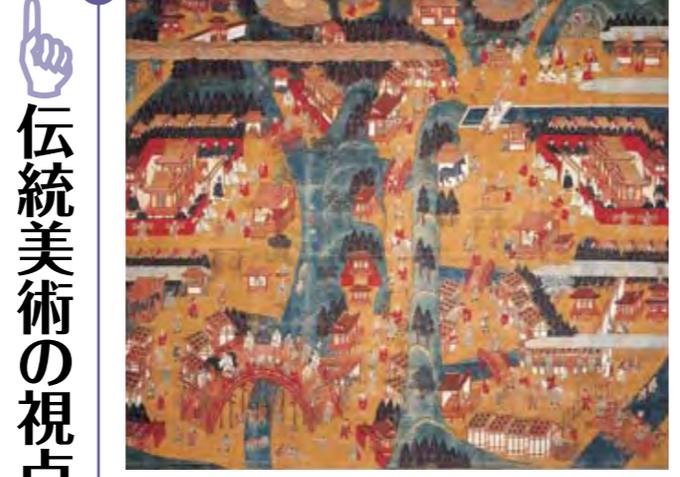


出典:「伊勢市景観計画・伊勢市」



工学研究科建築学専攻・准教授  
**浅野 聡** Asano, Satoshi

## 2 伝統美術の視点から再発見!



「伊勢両宮曼荼羅図」江戸時代・17世紀 紙本着色 165.4X178.7cm 一幅 神宮徴古館農業館蔵

**神宮の曼荼羅図**  
曼荼羅とは、本来、仏教の世界観を表したものです。上の図は、神宮両宮と参詣の様子を一幅に合わせ描いたものです。神宮は古来から特別な神社として一般庶民の参詣をきびしく制限してきましたが、平安時代の末期になると王朝財政の逼迫とともに、神宮に対する支持基盤も衰えたため、全国に信徒を広める努力を始めるようになりました。

**曼荼羅図を読みとく**  
曼荼羅には、上部に日輪・月輪、右下には宮川にかかる船橋とみそぎをする人々が描かれ、道中は、山田の町並みから上方へ外宮、天岩戸を経て、中央部で下方へ屈曲し小田橋・間の山を過ぎて、五十鈴川にかかる宇治橋に至ります。橋を渡ると内宮。内宮の上には朝熊山金剛証寺、その左には、二見浦と富士山が遠く望まれます。

**曼荼羅図がプレゼン資料?**  
そこで、宣教師兼ツアーガイドの役割を果たしたのが、御師(おんし)と呼ばれる神職団です。御師は、曼荼羅を携えて全国津々浦々を訪ね、村から代表者を選んで参詣させました。近世の一般的な参宮のかたちは、参詣者が御師の選んだ宿坊に泊まり、御師のガイドで両宮を参詣する、といったまるで現代のツアーのようでした。曼荼羅は、縦横に折れ跡が残っており、布教の道具として小さく折り畳んで携行していたようです。曼荼羅を使って神宮の魅力伝える御師の姿が浮かびます。

この「伊勢両宮曼荼羅」は、伝統美術以外の観点からも、非常に興味深い内容をはらんでいるようです。  
教育学部美術教育講座・教授  
**山口 泰弘** Yamaguchi, Yasuhiro



## 3 「怪異」は神がもたらす?

古代・中世には、「怪異」というものは神がもたらす啓示であり、人々にとって影響を及ぼす一大事でした。神宮においても同様で、特に平安時代以降は、諸神社において怪異が頻発し大きな災厄が起きる予兆とされました。怪異が発生した場合には必ず朝廷に報告され、軒廊御ト※(こんろうのみうら)が行われることによって、怪異に対してどのような対処をとったらよいか、その都度、慎重な判断が下されました。

**神宮での「怪異」**  
王権と最も密接な関係を持つ神宮では、怪異の発生には特に注意が払われていました。しかし、この怪異の発生には、大いに人為的な要因があったことが伺えます。神宮で発生した怪異の一例を挙げると、観応の擾乱の際に、「外宮の宝殿が鳴動する」という怪異が発生しています。実はこうした国家の存亡に関わる一大事が発生したタイミングと合わせて神宮では怪異が頻発していたのです。鳴動は第三者が確認できない怪異のため、とりわけ恣意的に利用されたようです。

**「怪異」と国家**  
こうした思考の在り方には、怪異発生と国家の動揺とを恣意的に結びつけようとする背景があったのではないのでしょうか。神宮祓宜たちは神宮での怪異発生を計画的に主張することによって、王権にとって重要な神社であることを朝廷に再認識させようとしたとも考えられます。また、室町時代には、怪異発生を奏上する際に、あわせて仮殿遷宮の要請を行うことがありましたが、次第に、朝廷の経済的理由等により対応処置が迅速に行われなくなります。怪異は神霊のあらわれですが、それを発現させるのは人間の意思であったのかもしれない。

※軒廊御ト：平安時代、朝廷で行われていたト占。



トイ(うらない)に用いる亀の甲羅



人文学部・教授  
**山田 雄司** Yamada, Yuji



おかげ参り 餅街道を行こう!



江戸時代には 数百万人の人が 参詣!!



甘いおもちで 旅の疲れを いやしていたんだね



落合芳幾「おかげまいり」江戸時代・慶応3年 かめやま美術館所蔵